
櫻井奈々子の闘い

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

櫻井奈々子の闘い

【Nコード】

N3388B

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

ある日、スキンヘッドに殺害された主人公・寺島幹生は、交通事故で帰らぬ人となった櫻井奈々子として奇跡的に蘇り・・・。

++ブローグ++

キンコンカンコンとチャイムが鳴り、放課後を迎えた。

「奈々子、一緒に帰ろうぜ」

そう言って来たのは、現在奈々子が交際中の久瀬^{くぜ} 泰一。身長は奈々子より高く、奈々子の頭が彼の胸の辺りである。

奈々子はその久瀬に、

「良いよ」

と、答えると支度をした。

「じゃあ、私こっちだから。また明日ね」

奈々子はそう言って、交差点で久瀬と別れ、横断歩道を渡った。

すると、一台のワゴンが信号を無視し、奈々子に向かって突っ込んで来た。

「奈々子、危ない！」

だが、久瀬の言葉虚しく、奈々子が気付いて振り向いた時には、既にワゴンは目の前に迫っていた。

奈々子はどうして良いのか分からず、呆然と立ち尽くした。

ドカンッ！——奈々子はワゴンに跳ねられ、宙を舞った。

奈々子を跳ねたワゴンは、止まる事無く走り去って行った。

その後、奈々子は近くの病院に運ばれた。

容態は、意識不明の重態だ。

夕方、一人の男が人通りの少ない道を歩いていると、ボブ。アップの様な体格のスキンヘッドと肩が接触した。

「何処見てんだコラッ！？」

「すみません」

男はムスツとした顔で謝った。

「何だてめえ？謝って済むと思ってんのか？」

スキンヘッドはそう言っで、男に果物ナイフを突き付けた。
「殺してやる」

グサッ！——男の腹に果物ナイフが突き刺さった。

「あ・・・あ・・・」

と、男は自分の腹を見下ろした。

スキンヘッドは思いつ切りナイフを引っ抜いた。
ベシャッ！——男の血が激しく飛び散った。

男はそのまま倒れ、息絶えた。

1・櫻井奈々子

東京都赤羽中央病院。奈々子は此処の病室のベッドで未だ眠っている。

周りには、心臓の鼓動をチェックしてデジタル表示する機械や、緊急時に看護師を呼び出すボタンがある。

「奈々子、目を開けてくれ・・・」

そう言つて奈々子の手を掴むのは、久瀬 泰一である。

その久瀬が手を掴んでいると、ピクツと指が動いた。

「奈々子!？」

久瀬がそう声を出すと、突然心電図がピーツと、心肺停止の音を鳴らした。

久瀬は慌てて呼び出しボタンを押した。

「どうしました?」

と、スピーカーからは女性看護師の声が返つて来た。

「奈々子が、奈々子が大変なんです!」

「直ぐ行きます」

看護師はそう言い残し、回線を切断した。

それから数分後、看護師がドクターを連れてやって来た。

ドクターは奈々子の胸に手を置くと、

「頼むから戻ってくれよ!」

と、心臓マッサージを開始した。

しかし、奈々子の心臓は未だ動かない。

「AED!」

「はい!」

看護師は近くにあるAEDを取りに行くと、直ぐに戻つて来た。

ドクターはそれを受け取り、素早く奈々子の胸に取り付けた。

「これから電気ショックを行います。患者から離れて下さい」

AEDはそう警告し、奈々子に電気ショックを与えた。

ドンッ！——奈々子の体が揺れた。

「げほっ！」

奈々子は咳き込んだ。

「も、戻った！」

ドクターはそう叫んだ。

「奈々子！」

久瀬が声を掛けると、奈々子は目を開けた。

「奈々子、俺だ！解るよな！？」

久瀬のその問いに、奈々子はこう答える。

「誰？」

その瞬間、奈々子の周りにいるドクターと看護師、久瀬は沈黙した。

「先生・・・」

「記憶喪失ですね」

ドクターはそう判断した。

この時、奈々子はこう思った。

（記憶喪失！？この俺が！？）

「君、自分の名前解る？」

ドクターがそう訊くと、奈々子はこう言った。

「寺島 幹生てらしま けんせいだ」

「寺島 幹生だって！？」

久瀬は驚いた。

「寺島って言ったら、三日前に神奈川で殺害された男の名前じゃねえか！」

その言葉に、奈々子はこう言い返した。

「ちよと待て！」

俺が殺された！？そんな馬鹿な！？現に俺はこうやって生きてるじゃねえか！」

そう言う奈々子に、久瀬は鏡を渡した。

奈々子は鏡を受け取ると、自分の顔を覗いた。

「ぬあつ、何だよこれ！？女の子じゃん！
てか、声も女の子だし！」

奈々子は驚きつつ、恐る恐るアソコに手を当てがった。
その奈々子から次に出たのは、

「無い！」

の一言だった。

「君、さつき『寺島 幹生』って言ったよね？」

ドクターはそう訊ねた。

「ええ、言いましたけど、それが何か？」

「君は本当に、寺島 幹生君？」

事故のショックで頭がおかしくなってる訳じゃあ無いよね？」

そう聞かれ、奈々子は頭を押さえた。

（そう言えばさつきから頭ズキズキすんだよなあ・・・）

と、その時、奈々子の脳裏に事故の時の記憶が過ぎ_よった。

奈々子は顔を真っ青にしながら、

（なっ、何だよこれっ！？俺の記憶じゃ無え！この体のっ、奈々子
とか言う子の記憶なのか！？）

ドクターは奈々子の顔色を見て、

「どうかしましたか？」

「いえ、ちよつと記憶が蘇ったもんで・・・」

「と言うと？」

「私、ワゴンに跳ねられてるんですよね。それで頭打って、
気絶し
て・・・」

奈々子のその言葉に久瀬は、

「お前、奈々子か？」

「そうよ」

と、奈々子は即答した。

（はあ・・・。俺とした事が、一体何を言ってるんだ？）
奈々子は心中でそう言い、全身を掛け布団で覆った。

1・櫻井奈々子（後書き）

ナ：「推理モノなのに、この展開ですか？」

作：「あ、いや、それはだな・・・って事で」

ナ：「あの、最後の所、聞き取れなかったので、もう一度言って貰えますか？」

作：（無視無視）

2・現場

「櫻井さん、お熱計りまあす・・・っ!？」

病室に入るなり看護師は驚いた。

傍には、こんな手紙が置いてある。

『神奈川に行きます

櫻井』

看護師はその手紙を取ると慌てて病室を飛び出し、ナースステーションに駆け込んだ。

「そんなに慌ててどうしたの？」

と、同僚の看護師が聞く。

「さっ、櫻井さんがいないんです！」

「ええっ!？」

「トイレにでも行ってるんじゃない？」

その問いに看護師は、病室にあった置き手紙を出して見せた。

「何よそれ!？彼女はまだ絶対安静よ！」

カタンコトン、と音を立て、京急本線が横浜から神奈川間を走っている。

奈々子はその電車の座席に座っていた。

「なあ、病院抜け出して、本当に良かったのか？」

そう言ったのは、奈々子の隣に座っている久瀬 泰一だ。

「しかし・・・何で神奈川なんかに？」

「決まってるだろ。俺をこの体にしたスキンヘッドを捕まえる為さ。それに、奈々子の為でもある・・・」

「為って、奈々子は東京で」

久瀬が言い掛けると、

「あのワゴンが神奈川ナンバーなんだ」

と、奈々子が掻き消した。

「て事は、寺島さんは奈々子を跳ねたワゴンと、寺島さんを殺したスキンヘッドの為に？」

「他に何かある？」

（何って、何て答えれば良いんだ俺？）

そうこうしている間に、電車は神奈川駅に到着した。

「で、あんたが殺されたって言うその現場ってのは何処なんだ？」
そう聞くのは、やはり久瀬だ。

その久瀬に、奈々子はこう言う。

「考え事してるから黙ってる」

「どうでも良いがあんた、奈々子の声で男口調はやめてくれねえか？」

「何故に？」
なにゆえ

「何か、奈々子と他の男が入れ替わったみたいで・・・」

「似た様なもんだろ。文句言うなら有り金置いて帰れ」

「そんな無茶苦茶なっ！？」

「だったら何も言うな。解ったな糞餓鬼」

その言葉に、久瀬は一瞬キレそうになったが、グツと我慢した。

「おいっ、いつまでそこにいるんだ！？」

と、久瀬の傍から何時の間にかいなくなっていた奈々子は、少し離れた所で叫んだ。

「ちよっ、ちよっと待てよ！」

久瀬は慌てて駆け出した。

神奈川県警捜査一課の取調室では、一人の女性が二人の刑事に話を聞かれていた。

彼女の名は三塚井 みつかい 小百合。寺島 幹生の彼女である。

「だから、何度も言ってるけど、その日は幹生には会って無いわよ

「！」

「嘘を吐くな！」

バシンッ！——刑事は机を強く叩き、

「事件当時お前と被害者がもめていたと言っ目撃証言があるんだ！

お前が殺したんだろ！？」

と、怒鳴り付けた。

「確かにあの日、幹生とは喧嘩したけど、殺してなんかいないわよ！」

奈々子こと幹生と久瀬は、道幅狭く、人通りが少ない殺風景な道を歩いていた。

「寺島さん、本当にこの道で合ってるのか？」

「ああ、間違い無え。此処はあの日、俺がスキンヘッドに殺された場所だ」

そう言うつと、奈々子は突然走り出した。

「あそこだ！」

「おっ、おい！？」

と、久瀬は慌てて後を追う。

「でっ！」

久瀬は急に立ち止まった奈々子の背中に埋まった。

「何だよ。急に止まるなって」

「此処だ」

「あ？」

「俺は此処で刺殺されたんだ」

2・現場（後書き）

本編とは関係無いが、2006年12月の18、19日の早朝にかけて、入浴中に眠ってしまい、溺れて亡くなった祖母が、2、3日前に俺が風呂に入って何となく湯船見たら、普通に寝てるし！しかも栓抜いてあつて、お湯張って無えのに、お湯入ってる！！残留思念でも見たか！？
それとも・・・。

あ、不定期ですが、これからは後書きに、作者の実体験談を載せていこうと思います。

以上

3・幹生と奈々子の関係

「俺は此処で刺殺されたんだ」

奈々子はそう言つと、再び駆け出した。

「ちょっと待てよ!」

と、久瀬は追い掛ける。

「うっせー!」

奈々子はそう言い、全速力で走り、久瀬を引き離して行つた。

「はっ、速え!」

久瀬がそう言つた時には、奈々子は4メートル離れていた。

(寺島さん・・・速すぎる・・・。奈々子でさえあんなスピードは・・・)

そう心中で呟きながら、久瀬は止まる事無く追い続けた。

すると、奈々子の速度が段々と遅くなり、ついには止まってしまった。

そのおかげでなんとか追いつくと、奈々子は顔を真っ青にし、胸を押さえて前屈みになっていた。

「奈々子は・・・心臓・・・病か?」

その問いに、久瀬はこう言う。

「何の事だ?」

「お前・・・彼氏の癖して何も知らないのか。つてのはどうでも良い。俺の家で一休みだ」

奈々子はそう言つて、道ばたにある二階建ての家を指差すと、門を開けて入って行つた。

その門の横の表札には、<寺島 幹生>と書かれている。

ガチャ——奈々子は扉を開けた。

「カギ掛けてねえのかよっ!」

「仕事上、家にカギは掛け無えんでね」

「どんな仕事だよ?」

「私立探偵だ」

と、奈々子は土足のまま上がった。

「靴脱がなくて良いぞ」

奈々子はそう言っていると、階段を上って行き、部外者立ち入り禁止と書かれた部屋に入った。

幹生曰く、＜自分の部屋＞らしい。

その部屋に、久瀬も入った。

「奈々子の部屋と比べて随分立派な部屋じゃねえか」

「奈々子の部屋は散らかってるのか？」

「散らかってるなんてもんじゃない。ゴミの山だ」

久瀬のその言葉に、奈々子は顔を悪くした。

「奈々子、部屋がゴミの山だから、周りの奴らに＜ゴミ子＞なんてあだ名付けられてるぜ」

（俺はそんな奴の体に入れられたのか）

と言うのは、敢えて口にしない奈々子である。

「何やってんだ？」

久瀬は、机の引き出しを開けてゴソゴソと何かを探している奈々子に声を掛けた。

「これを見る」

そう言って、奈々子は引き出しから、幹生と少女が写った一枚の写真を出し、久瀬に渡した。

久瀬はその写真を受け取ると、

「これっ、奈々子の部屋にあるのと一緒にゃねえか！

何であんたがっ！？」

「お前には奈々子が世話になってるから教えてやる」

奈々子はそう言っていると、数秒黙り込み、

「奈々子は、俺の実妹だ」

「何だってっ！？」

久瀬は奈々子の言葉に驚いた。

「寺島さんっ、それホントかつ！？」

「俺の本当の名は櫻井 幹生・・・。＜寺島＞は15年前に俺を引き取ってくれた爺ちゃんの姓だ」

奈々子がそう言うと、暫くの間沈黙が続いた。

「さて、そろそろ行こうか」

と、奈々子は言い、部屋を出て行った。

久瀬は部屋を飛び出すと、

「おいっ、行くなってどこへっ!？」

「周辺の聞き込みだ!スキンヘッドの情報を集めなきゃな!」

奈々子は久瀬を見ながら言うと、階段を降りて行った。

3・幹生と奈々子の関係（後書き）

幹生と奈々子を兄妹にした理由は、ストーリー展開に必要なからなんですよね。

4・聞き込み

家を離れた奈々子一行は、現場である人通りの少ない道を歩いていた。

「あのさ、何で付いて来るんだ？」

奈々子は先ほどからずっと付いて来ている久瀬に聞いた。

「何でって、レディー一人だけに出来ないだろ。それに、此処って事件があつた場所だから、犯人が近くに居るかも知れない」

「それは無えと思うぞ」

「何故そう思うんだ？」

「女の勘よ」

「あんた男だろ・・・」

「たつた今か弱い女の子に染まりましたわ」

「何だよそれ？」

「あら、泰一って意外と馬鹿なのね」

「どう言う意味だ？てか泰一って呼ぶなっ！そう呼んで良いのは奈々子だけだっ！」

「何言つてんのよ？私は奈々子よ？」

「見た目は、な」

「うっ、言い返せ無え！」

と、落ち込む奈々子。

商店街に出ると、奈々子は偶々通り掛かった人にこう訊ねた。

「三日前、この辺りでボブ。ツプの様な体格のスキンヘッドを見掛けませんでしたか？」

その問いに人は、

「それって、こばやんの事じゃないかな。あつ、こばやんってのは小早川こばやかわの事で、暴走族のメンバーだよ。この辺では有名なんだけど、そいつがどうかしたの？」

「実は・・・」

そう言つと奈々子は、

「そいつ、三日前に直ぐそこで人を殺してるみたいなんです」

と、耳元で囁いた。

「えっ、寺島探偵殺したのって、女じゃなかったの？」

「女？」

「ああ。昨日、警察に逮捕されたらしい。確か、三塚井 小百合って言つてたな。聞いた話によると、寺島さんの恋人だとか」

（さっ、小百合が俺を殺しただつてっ！？）

奈々子は顔を真つ青にした。

「泰一、警察行くよ！」

奈々子はそう言つと、神奈川県警に向かって走り出した。

「バカッ、あんた心臓！」

と、久瀬は慌てて奈々子を追い掛けた。

「急ぐならおぶつてやる！」

「ありがとう！」

奈々子は久瀬の背中にしがみついた。

「でっ、どっちだ警察はっ！？」

「商店街を真つ直ぐ抜けて信号のある大通りを右に曲がつた突き当たり！」

「任せろ！」

久瀬は奈々子をおぶつて県警を目指した。

「ぬおおおおっ！」

久瀬は雄叫びをあげながら、県警に飛び込んだ。

その久瀬を見て、外で見張りをしている警官は、目を真ん丸にして驚いた。

「着いたぜ、寺島さん」

久瀬はそう言つと、奈々子が既に背中にしがみついていない事に気付いた。

「寺島さんっ!？」

久瀬は辺りを見渡した。すると、受付の前に奈々子の姿を見付けた。

奈々子は受付の婦警に、

「あの、三塚井 小百合が逮捕されたと聞いたのですが」
「面会ですね？」

三塚井容疑者なら、地下ですよ」

「ありがとう!」

奈々子は礼を言つと、地下に向かった。

(全く警察は何やってんだっ!？もっと良く調べろっ!)

4・聞き込み（後書き）

聞き込みで情報手に入れんの迅^はやつ！

5・容疑者

県警の地下に降りてみると、面会の受付があり、その先に鉄格子の付いた部屋がいくつか並んでいた。

「あの、三塚井 小百合さんに会いたいのですが」

奈々子は受付の警官にそう言った。

「ではこちらにお名前を記入して下さい」

警官はそう言って、多数の名前が書かれたリストとボールペンを渡した。

奈々子はそこに、＜櫻井 奈々子＞とサラサラッと書くと、警官に返却し、三塚井 小百合がいる牢の前に立った。

「三塚井 小百合さんですね？」

と、牢の中の女性に、奈々子は声を掛けた。

「え、貴方は？」

「さくつ・・・いや、寺島 奈々子。寺島 幹生の妹です」

「ほっ、ホントにつ！？ホントに幹生の妹さんっ！？てか幹生に妹さんがいたのっ！？私聞いて無いわ！」

それより聞いて。此処の刑事^{デカ}つたら酷いのよ。私、幹生の事殺して無いのに一方的に殺したと決めつけて牢屋に入れられて・・・」

その愚痴っぽい言葉を、奈々子は頷きながら聞いた。

「貴方が犯人では無い事は解ってます。必ず真犯人捕まえて助けてあげますね」

そう言うつと奈々子は、小百合から離れ、
「待って」

小百合が奈々子を呼び止めた。

「ホントに、犯人捕まえられるの？」

その問いに奈々子は振り返り、

「私は幹生の妹よ？お兄ちゃんに出来て私に出来ない事なんて無いわ」

そう言うつと、今度は本当に去って行つた。

小百合はその奈々子の後ろ姿を見つめながら苦笑した。
(幹生そっくり)

奈々子は県警の入り口に来ると、

「さあて泰一、早速行くよ」

と、彼女を待っていた久瀬に言った。

「え、何処に？」

奈々子は溜め息を吐き、

「決まつてるでしょ、捜査に行くのよ。」

それとそこお巡りさん」

と、奈々子はお巡りさんに封筒を差し出した。

「それ、交通課の宮子さんに渡しておいて頂戴」

お巡りさんは困り果てた顔で、

「解りました」

と、大切に懐へしまい込んだ。

「じゃ、行こう泰一」

「あ・・・おう」

5 容疑者（後書き）

・
・
・
・
・
・
ネタが思い付かない。

6・殺された容疑者

「お前か……。お前が殺したのか」

スキンヘッドの前に立っている黒い人影はそう言った。

「なっ、何の事だっ!？」

スキンヘッドの男はとぼけた。

目の前の人影はニツと笑い、懐から鋭利な刃物を取り出した。

「なっ、なんのつもりだっ!？」

「お前をつ、殺してやるっ!」

グサッ!——黒い人影は鋭い目つきでスキンヘッドの男の腹に刃物を刺した。

「うっ……。」

スキンヘッドは呻き声をあげると、その場に倒れた。

「何だあれ?」

泰一は目の前にある数台のパトカーを指差して言った。

そのパトカーの脇には、Keep outと言う黄色いテープが張られ、一人の警官が立っていた。

「きつと事件ね」

奈々子はそう言つと、その警官の所に行き、何があつたのかを訊ねた。

すると警官はこう答えた。

「さっきこの空き地で事件があつて、調べてる所なんだ」

「そうなんだ?じゃあ失礼」

奈々子はそう言つと、黄色いテープをくぐつて空き地に入った。

「こっ、こらこら、勝手に入らない!」

奈々子は振り向き、

「あんだつてえ?」

と、怖い顔で警官を睨みつけた。

奈々子の迫力に負けた警官は、

「どっ、どうぞ御自由に！」

と、震えながら言ってしまった。

「ありがとう」

奈々子はそう言つと、ニツコリと笑い、遺体を見つめてる刑事の所へ行つた。

「こりゃ酷い。人情の欠片も無えな」

そう言つたのは、ちよつと老けた髭の生えた刑事だ。

「一体、誰がこんな事をしたんでしょうか・・・」

「そんな事より、被害者の身元を判明する物が何も無いなんてな」

「これじゃあ、このスキンヘッドが何者なのか、検討もつきませんね」

「小早川 博文。暴走族のメンバーですよ」

そう言つたのは、二人の刑事の後ろに立っている奈々子だ。

刑事はえつと言つ顔で振り向いた。

「これは私の推理だけど、恐らくこの人は、何者かに鋭利な刃物で刺された後、何十回と斬られたのでしょう。」

「害者の腹を見て下さい」

と、害者の腹を指差す奈々子。

そこには傷が化膿しているのが見られた。

「これは生活反応と言ひ、生きている間に出る反応。恐らく死因は、鋭利な刃物で腹を刺された事による失血死では無いかと思ひますね・

・・・」

と、推理をする奈々子に、若い刑事はパチパチと拍手をした。
すると老けた刑事が咳払いをし、

「あんた誰だね？」

「あ、申し遅れました。私、こつ言つ者です」

奈々子はそう言つて、懐から名刺を出して渡した。

「櫻井 奈々子。探偵です」

「それで、あんたはこの男を知ってるのかね？」

「勿論です！この男は先日、私立探偵の寺島 幹生を殺害した真犯人です！」

奈々子がそう言いきると、老けた刑事はこう言った。

「何言ってるんだね君は？寺島さんを殺したのは、三塚井 小百合だよ。第一、彼の死因は知ってるのかね？」

「それは、腹部を刺されたのが致命傷となって・・・」

「いや、彼の死因は頭蓋骨陥没による硬膜下出血。腹部を刺されたのが致命傷になった訳じゃないですぜ」

「それっ、一体どう言う事！？」

「現場に落ちてたんだよ。血塗られた岩がね」

そしてそれを調べた結果、三塚井 小百合の指紋が出たので、三塚井 小百合を殺害容疑で逮捕したんだ」

（ばっ、バカなっ！？）

小百合が俺を殺す筈が無い！きっと何かの間違いだ！

調べてやる。この不可解な事件を！

そう心に決めると、奈々子は身の毛もよだつ程恐ろしい顔で空き地を去って行った。

（俺を殺した事を後悔させてやる！）

7・失われし手掛かり

横浜のとあるスナックバー。ちょっと古ぼけているが、ちゃんと酒場である。

表の看板には、＜スナック・タカヤマ＞とある。

（オッチャンいるかな？）

と、口には出さず、スナックの扉をあけた。

「いらっしやい」

マスターはニツコリとした表情で言った。が、その頭に？が浮かんでいる事は言うまでも無い。何しろ奈々子は未成年なのだから。

「マスター、河内のオッサンは？」

「河内さんならさつき、女の人が訪ねて来られて、一緒に出て行ったよ」

「どこに行ったか解る？」

「解らないなあ・・・」

「じゃあ戻って来たら此処へ連絡下さい」

奈々子はそう言つと、携帯の番号が書かれた紙をテーブルに置いた。

（この番号は確か寺島さんの・・・。この娘、寺島さんと何か関係が？）

マスターは意を決して訊く事にした。

「君、寺島さんの知り合いかなんか？」

「櫻井 奈々子。寺島 幹生の妹です」

と、その時、パアンツと言う音が聞こえた。

（銃声！？）

それはスナックの裏からだった。

「マスター、裏口は！？」

「そ、そこにありますけど・・・」

奈々子は裏口に向かった。

ガタンッ！——奈々子は勢いよく扉を開けて外に出た。
外には40代半ばのオッサンが倒れていた。
河内だった。

「オッサン!？」

奈々子は倒れている河内のオッサンに駆け寄った。

（銃弾……。撃たれたのか。まだ息があるな）

「オッサン、しっかりしろ！」

「う……。う……。」

「河内のオッサン、何があった？」

「お……。女……。撃った……。」

「何!？」

「こ……。これを……。頼む……。」

そう言ってオッサンは、奈々子に小型のMP3プレイヤーを渡した。

「それに……。録音……。して……。ある……。」

オッサンはそう言い残し、力尽きてしまった。

「オッサンッ、オッサーン！」

ガチャッ——奈々子はMP3プレイヤーの再生ボタンを押した。

『アンタ、何を知ってるの？ええっ？教えなさいよ!』

『い、いやっ、私は何も知らない！本当なんだ!』

『あの日、私があいつを殺した所、写真に収めたでしょ？その写真を渡せば良いのよ』

『そっ、そんなの知らない!』

『これでも知らないって言える?』

『……。分かった。これがその写真だ』

<パアンッ!>

ブツッ——録音はそこで終わっていた。

（写真？一体、何の？

それより、オッサンは何を知っていたんだ？何か、見てはいけない物を見てしまったのか？)

そう考え事をしている奈々子に、例の老けた刑事が声を掛けた。

「君、詳しく話を聞かせてくれないかな？」

(恐らく、河内のオッサンは口封じの為、女に殺された。間違い無いだろう・・・)

「聞こえてるかね君？」

「えっ？あ、スミマセン！ちょっと考え事をしてたもんですから・・・」

で、私に何か？」

「先ず、河内さんの事、お悔やみ申し上げます。それと、アンタの事色々調べたんですがねえ……。アンタ、寺島さんの御兄妹なんだそうですね」

「あ、いやあ、参ったなあ……。刑事さん、そんな事までお調べに？」

「ちよつと気になったもんでね。で、河内さんの事、聞かせてくれないかね？何でも良いんだ」

「オッサン、死に際にこれを・・・」

奈々子はそう言つて、刑事にMP3プレイヤーを渡した。

「河内のオッサン、口封じの為に殺されたんです！そのプレイヤー再生してみてください！」

そう言われた刑事は、プレイヤーを再生し、聞き終わるところ言つた。

「確かに、その可能性が高いですな。これ、預からせて貰います。過去の犯罪記録にこれの声紋と一致するものがあるかも知れませんが、そう言つと刑事は、MP3プレイヤーを内ポケットにしまった。

「じゃあそう言つ事で、後は我々警察に任せて下さい」

「はあ・・・」

奈々子は素っ気無い返事をした。

「それじゃあ」

刑事はそう言つと、スナックを出て行つた。

(つて、任せてられつかよ)

「マスター、河内のオッサンを訪ねて来た女の事、何か覚えてますか？例えば、特徴とか」

「うーん、よく覚えてないな。待てよ？確か、金髪のロングヘアーだったな」

「金髪のロングヘアー？間違い無い？」

「ああ。この辺じゃ珍しいからよく覚えてるよ」
それを聞いた奈々子は、

「そんなバカなっ！そんな事あり得ないっ！だって、だって彼女は、小百合は警察に捕まつてんだからっ！一体どうやったら抜け出せるつてんだっ！？」

と、鬼の様な顔をして言つた。

「えいマスターッ、アンタが見た女はコイツかあっ！？」

酷く荒れている奈々子は、小百合の写真を出して彼に見せ付けた。

「こ、この人ですっ、間違いありません！」

奈々子は脱力し、椅子に座つてテーブルに伏せつた。

すると急に、

「ハッ、ハハ、ハッハッ、アアハハハハッ！」

と、大声で笑い出した。

「面白えっ、面白えっ！やってやろうじゃんかっ！この事件、絶対解いてやるよっ！」

そう言つと奈々子は、鬼の様な顔になつた。

7 失われし手掛かり（後書き）

なっ、奈々子がぶっ壊れた！

8・いなくなった小百合

神奈川県警地下牢。そこには鉄格子のついた部屋が幾つかあり、逮捕された犯罪者達が一人ずつその部屋に閉じ込められている。その部屋の一つに、三塚井 小百合は閉じ込められている。

その小百合の前に、奈々子がやって来た。

「奈々子ちゃん」

その言葉に奈々子は、一瞬ニコツと笑うと、真剣な表情で鉄格子を調べ始めた。

（やはり、外からしか開けられないか）

「何やってるの？」

「あつ、いやつ、これはそのつ、何でも無いです！」

所で、今日は事情聴取とかってありました？」

「いいえ、ありませんでしたけど……。何故そんな事をお聞きに？」

と、小百合は真剣な表情で訊いて来た。

「何と無いです。それじゃ」

奈々子はそう言つと、その場から去って行つた。

小百合は、去って行く彼女の背中を、ジッと睨みつけた。

「フフ」

小百合は小さく笑った。

地下から階段を二つ昇つて2階へ出ると、奈々子は捜査一課の部屋の前にやって来た。

「おや、奈々子ちゃん」

と、後ろで声が聞えた。

振り向くとそこには、例の老けた刑事が立っていた。

「あ、刑事さん……。丁度良い所で会いましたね。」

あの、例の声、誰の声か解りましたか？」

「君には悪いけど、あの声は三塚井 小百合のモノだった。しかしどうやって抜け出したんだ？」

（やはりアイツの声か。それに、マスターの証言もある・・・。）

この二つがある限り、アイツがあそこでオッサンを殺したと言う状況は覆せ無いだろうな」

「あ、そうだ。刑事さんをお願いあるんだけど」

「何かね？君の頼みなら何でも聞こう。寺島君には生前世話になったからね」

「殺された小早川の交友関係調べてくれます？」

「分かった。調べておく」

そう言うのと刑事は部下を呼び出し、奈々子の前から部下と共にいなくなつた。

「ふう・・・」

奈々子は一息吐くと、上の階の交通課へ行つた。

神奈川県警交通課には、高村^{たかむら} 宮子と言う敏腕婦警がいる。彼女に交通事故を捜査させたら必ず犯人が検挙される、と言つても過言では無い。

奈々子は今、その交通課に来ている。

「えーと、宮子さんですよね？」

奈々子は、警部席に座っている女性に声を掛けた。彼女が噂のく

高村 宮子^{みやこ}だ。

「そうだけど、貴女^{あなた}は？」

「私、探偵の櫻井 奈々子です。表のお巡りさんから手紙を受け取つてますよね？」

「ああ、貴女が手紙の差出人ね。」

例の件、調べておいたわよ。あのナンバーの車は、三塚井 小百合さんのね」

「それ本当ですかっ!？」

「ホントよ。でもね、あの日は彼女、車には乗って無いの」
「どう言う事？」

「彼女が言うには、双子の妹に貸してたそうよ」

「えっ、小百合さんに妹がいるんですか？」

「いるわ。名前は百合子、三塚井みつかい 百合子よ」

（三塚井 百合子……。少し話を訊いてみよう）

「ありがとうございます」

奈々子はお辞儀をすると、再び地下の鉄格子の部屋の前に行った。
（なっ、小百合がいねえ!）

奈々子はしゃがんでベッドの下を覗いた。しかし、小百合の姿は
何処にも無い。

奈々子は慌てた様子で、牢屋の鍵を借りに行った。

9・牢屋の抜け穴

ガシャンッ！——奈々子は鉄格子を開けて中に入った。

（小百合の奴、何処へ行つたんだ？）

奈々子は牢屋の中をくまなく捜した。が、しかし、やはり小百合の姿は無かった。

「署内に脱獄の連絡をお願いします」

奈々子はそうお巡りさんに言った。

するとお巡りさんは駆け足で去って行った。

（まさかとは思わんが、抜け穴とか無えだろうな？）

と、奈々子は牢屋の壁、床などを調べた。

コンコン、コンコン——壁を叩く音が響く。

（っ、此処だけ音が違うつ！？）

そう思った奈々子は、もう一度壁を叩いてみた。

壁はトントんと音を立てた。

「はっ！」

奈々子は思いつきりその壁を蹴り飛ばした。

ズドンッ！——壁は大きな音を立てて奥に倒れた。その先には、通路が一直線に続いている。

（隠し通路！？）

奈々子は驚きつつも、その通路を進んでみる事にした。

「よしっ！」

気を引き締めると奈々子は、通路に足を一步踏み入れた。そして一步、また一步。着々と確実に進んで行く。

それから暫くすると、上へ昇る為の階段が見えて来た。

奈々子は躊躇う事無く、その階段を昇って行った。

（明かりが差してる。あそこが出口だな）

と、奈々子は一気に駆け上がり、階段を塞いでいる蓋を持ち上げた。

グワツ、ギイーン——なんとも嫌な音が鳴る。
蓋が完全に開くと、奈々子は顔を外に出した。

（何処だ此処？）

と、奈々子は辺りを見回した。

辺りには、草花が一面に生い茂っていた。

（此処は、花畑なんかか？）

と、その時、奈々子に瓜二つの少女が現れた。

「やっと、会えたね」

瓜二つの少女はそう言った。

奈々子は振り向くと、

「あんたは？」

その問いに少女は、クスクスツと笑ってこう言った。

「知ってるクセに」

「えっ？」

「私は貴方、貴方は私。意味が理解出来るかしら？」

「お前、奈々子か？」

奈々子が即答すると、瓜二つの少女は頷いた。

「此処は何処なんだ？」

「三途の川を渡った先にあるお花畑よ。貴方に言いたい事があって、呼び出したんだけど・・・」

「私・・・俺に言いたい事？」

「今回の事件、かなり難解だよ？」

「それなら大丈夫さ。もう、犯人の目星はついてる。

それより、早く元の世界に・・・」

すると、眩い光りが奈々子を包み込んだ。

「うわっ！」

あまりの眩しさに、奈々子は目を腕で隠した。
そして気が付くと、県警の裏側に立っていた。

（出口はっ！？）

奈々子は慌てて後ろを振り返った。

地面には階段があり、その脇にコンクリートの蓋が置いてあった。
（あの通路、此処へ出る為の抜け穴だったのか。にしても、何であんなものが牢屋に？）

ボグッ！——奈々子は背後から何者かにバットの様なもので殴られた。

「うつ！」

奈々子はその場に倒れた。

「あつ、アンタは・・・」

奈々子はそう言い残し、気を失った。

9・牢屋の抜け穴（後書き）

牢屋に抜け穴！

奈：「何であんなのがあるんだ？」

作：「ああああっ、それは次回につ！」

奈：「ケチッ！」

10・御対面の時

「言いたかったんだけど間に合わなかったっ、ごめん！」

真つ暗闇の中でそう言ったのは、奈々子に瓜二つの少女だった。

「いや、お前が謝る事じゃない。油断してた俺が悪いんだ」

「でも私がちゃんと話していれば、お兄ちゃん気絶しなくて済んだのに」

「良いか奈々子？探偵と言う職業には危険が付き物なんだ。お前が先を知っていて教えてくれたとしても、危険を回避する事は出来無えんだ」

「じゃあ何でそんな職業なんか？」

「自分の推理で犯人追い詰めるのが面白いから」

奈々子がそう言つと、

「そんな理由であつ！？」

と、瓜二つの少女は言い、上へ吹っ飛んで行った。

「ん・・・んん？」

奈々子が目を開けると、手足を縄で縛られ、口を粘着テープで塞がれていた。

（なっ、何だよこれっ！？）

「ふがつ、ふがつが！」

奈々子は取り敢えずもがいてみた。しかし、どうにでもなる訳でも無く、彼女は静かになった。

「お目覚め？」

と、何者かの影が奈々子の前に現れた。

ビリッ、ビリビリッ！——影は奈々子の口を塞いでいる粘着テープを剥がした。

「やっぱリアンタが犯人か」

奈々子はそう言つと、少し間を空け、

「三塚井 百合子！」

と、叫んだ。

「アンタ・・・小百合は、小百合は実在するのか？」

「どうかしらね。例の空き地付近でも捜してみたら？」

「まさか、殺したのか？」

「さあね？」

それにしても言葉遣いの悪い餓鬼だな。少しは礼儀を弁えたらどうだ？ええ？」

と、奈々子の髪の毛を引っ張って持ち上げる百合子。

「いてててててつ、髪が千切れっからやめろっ！」

「貴方の言葉遣いが悪いからこうなるのよ」

ゴソッ！——百合子は奈々子の頭を床に叩き付けた。

「うつ！」

奈々子の視界が霞んだ。

（やばいつ、今度こそ殺される！）

奈々子は焦ると共に覚悟を決めた。

「なあ、一つ訊いて良いか？」

「良いわ。何が訊きたい？」

「小早川殺したの、あんたか？」

奈々子のその問いに、百合子は小さく笑うところ言つた。

「彼を殺つたのは小百合よ」

「成る程。それで小百合を殺害し、その現場を見てしまった河内さんを殺害したって訳か」

「ただの餓鬼だと思つてたけど、結構頭良いのね。」

そう、私が小百合と河内とか言う男を殺したのよ」

「それじゃあもう・・・」

奈々子が言い掛けると、百合子が拳銃を取り出して奈々子の額に当てがった。

「これが何か判る？拳銃よ、け・ん・じゅ・う」

その時、ブチッと言う音がし、奈々子の両手を縛っていた縄が切断された。

奈々子はニヤリと笑うと、横に転がりながら懷から拳銃を取り出し、百合子に照準を合わせた。

「拳銃チャカを持つてんのはアンタだけじゃねえぜ」

（とは言うものの、霞んでよく見え無え）

「な、何であんたみたいな餓鬼が持つてんのよ？しかもチャカだつて？暴力団でも気取つてゐるつもり？」

奈々子は引金を引いた。

パアンツ！——その音と共に、弾丸が百合子の頬をかすった。

「ちよつと何するのよっ！？」

パアンツ！——今度は百合子が発砲。弾丸は奈々子の足に風穴を開けた。

「っ！」

痛そうな顔をする奈々子。

「取り敢えずその物騒な物を捨てろ」

そう言つて奈々子は、引金に指を当てた。

パアンツ！——百合子は発砲。弾丸はカンツと音を立てて奈々子の拳銃を吹っ飛ばした。

「死にたくなければバカな真似はしない事よ？ま、こっちはアンタを生かそうなんてこれっぽっちも思つちやいないけどね」

「それは残念だ。」

所で、寺島 幹生はあんたが？」

「ええ。でも驚いたわ。一卵性の双子だと指紋が同じになるのね」

「いや、区別がつきにくいだけで一致はしないよ。まあ、そのせいで小百合が捕まつたみたいだけど・・・」

それより、何時から小百合と入れ替わっていたんだ？」

「貴方が最初に小百合と会った直後よ。例の抜け穴を通つてね」

「その時、アンタは小百合を殺害し、例の空き地付近に運び、戻つて例の抜け穴から牢の中に入ったつて訳か？」

「その前に河内とか言う奴を射殺してからかしらね」
「.....」

奈々子は言葉を失った。

10・御対面の時（後書き）

一気に書き貫こうと思った訳だが、長くなりそうなので一旦区切ります。

はてさて、奈々子の運命は如何に!?

次話、ご期待!

11・終局

「・・・・・・・・」

奈々子は言葉を失った。

「さて、話も終わった事だし、そろそろ貴女にも死んで貰いましょうか」

と、拳銃を奈々子に向ける百合子。

「その前に、一つ聞かせて欲しい事があるんだけど」

「ダメ。もう話す事なんて無いから」

「あるだろ・・・東京で起こった轢き逃げ事件が」

その言葉に、百合子は顔色を変えた。

「なっ、何の事かしら？」

と、惚ける^{とほ}百合子。

「惚けるなよ？」

知ってるんだ。あんたが東京で、女子中学生を轢き逃げしたの」

「何であんたが知ってるのよ？」

「それは、私がその轢き逃げされた被害者だからよ」

その言葉に百合子は膝を落とし、拳銃を手放した。

「嘘よ。そんなの絶対あり得ない。だって、あのスピードよ？生きてる訳が無い」

「確かに、あんたが轢いた女子中学生は亡くなった。しかし、奇跡が起こったんだ。

この俺、寺島 幹生が女子中学生の体で蘇ると言う奇跡がなっ！」
奈々子は身の毛もよだつ程の表情でそう言った。

「そんなオカルトじみた事ある訳無いじゃない。きつとあれよ。事故の時に頭打ってそのショックでおかしくなったのよ」

と、奈々子の言葉を否定する百合子。

「それより、背中に何隠してるのかな？」

そう訊かれ、後ろ手に携帯を持った奈々子は、咄嗟にこう言った。

「な、何もしてないし、隠してもいないよ」

「まあ良いわ。どうせ貴方は此処で死ぬんだし」

そう言つて、百合子が拳銃を捨てた時、

「そこまでだ！」

と、拳銃を持った数人の刑事が入つて来た。

「バカなつ、何故此処がつ！？」

その問いに奈々子は、

「これさ」

と、携帯を前に出した。

「私はこれを使って警察に掛けてたのよ」

「そう言う事だ。銃を捨てろ」

百合子は顔色を変え、拳銃を落とした。

「今だつ、確保！」

と、百合子に飛び掛かる刑事達。

ガシャツ！——百合子に手錠が掛けられた。

「午後3時30分、三塚井 百合子を殺人罪で逮捕」

と、例の老けた刑事が時計を見ながら言った。

「刑事さん、早いですね」

「君がその携帯で110番してくれたおかげで場所の特定が出来たんだよ。感謝しなくてはな」

その言葉に奈々子は、

「通話料、当然払つてくれますよね？」

「うむ、謝礼金として警察の方から払わせて貰うよ」

刑事はそう言ったが、心の中ではこう思っていた。

（この尼、幹生あにと同じく鬼だな）

11・終局（後書き）

自分で言つのもあれだが、11話は駄作だな。

++エピソード++

ZZZZZZZ...

寺島家の部屋のベッドから、小さなこびき鼾が聞こえる。

鼾の主は、櫻井 奈々子である。

その奈々子が、今、夢を見ている。

「解決出来たんだね、お兄ちゃん」

そう言ったのは、例の瓜二つの少女だ。

「ああ。これで俺も、あの世に逝ける」

「何言ってるのお兄ちゃん？」

お兄ちゃんはこれから、あたしの体で生きて行くんだよ」

「え、俺がああの世に逝って、お前にこの体が返るんじゃないのか？」

「本来ならそうなんだけど、神様をお願いしたの。お兄ちゃんとずっと一緒に良いって」

「言ってる意味が解らん」

と、首を傾げる奈々子。

「一つの体を二人で使って事なんだけど、解らない？」

「と言うとつまり、この体にお前と俺の二人が入るって事だよな？」

「そうだよ」

「お前、俺に相談無しに勝手に決めたのか？」

その問いに少女は、首を横に振り、

「お兄ちゃん、あたしと約束したじゃない。両親が殺された時、死ぬまでずっと一緒にだって。」

けど、あの後あたしは親戚の叔父さんに引き取られ、お兄ちゃんはお爺ちゃんに引き取られた」

「確かに約束はした。だからって、勝手に決める事無いだろ。」

それより、俺はこの体を早く出たい」

「何で？」

「俺までゴミ子なんて呼ばれるのは嫌だ」

奈々子がそう言つと、少女は鋭い目つきでこつ言つた。

「そのゴミ子って言うの、誰から聞いた？」

「久瀬って奴だけど？」

「それ、本当？」

その時、奈々子はとても恐ろしい何かを感じた。

「お前、何考えてるんだ？」

その問いに少女は、

「あんな男もう捨ててやる！」

と、吐き捨てた。

（奈々子の奴、ゴミ子と呼ばれるのが相当嫌なのか）
と言うのは、敢えて口にしない奈々子である。

++エピソード++（後書き）

多分批判が沢山来るだろうな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3388b/>

櫻井奈々子の闘い

2010年10月8日15時33分発行